

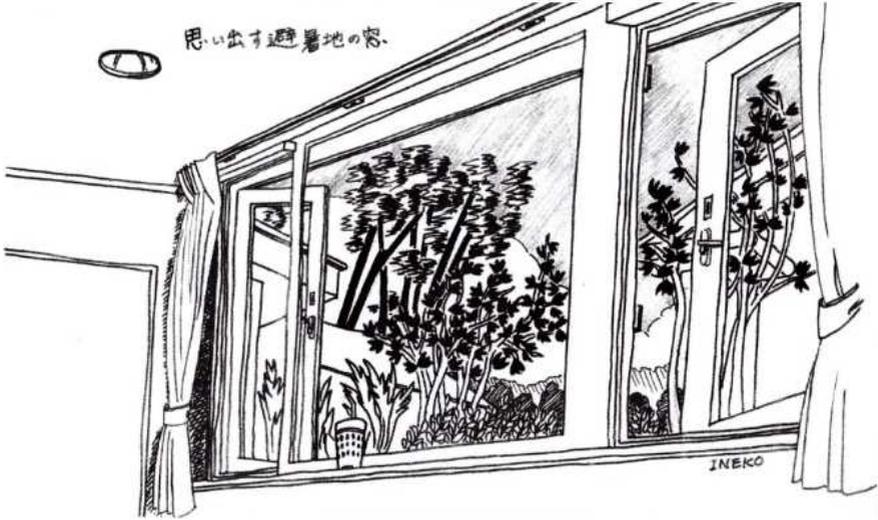
2006年 10月15日発行(隔月刊)



# う 羽 化 か

ISSN1880-8646  
2006年10月  
第58号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
編集責任者 宇田川 幸 子



## 目 次

出版UD研究会セミナー 「識字」について	1
点字から識字までの距離(54) みどり学級へのサービス(3)(山内 薫)	6
出会い (生田典子)	10
見果てぬ夢を(1) (山本優子)	12
漢文のページ	19
ご報告とご案内	21
編集後記 (木下和久)	23

## 「識字」について



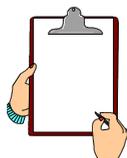
この八月三十一日に催された「出版UD研究会」のセミナーで、岡田が漢点字のお話をさせていただきました。「UD」とは、「ユニバーサル・デザイン」の略で、書籍に関してのユニバーサル・デザインを考えるとというのが、この研究会の目的です。

昨年から十三回に渡ってこのようなセミナーが企画されました。その一つ一つを活字に起こして、一冊の本にして出版されます。（案内参照）

漢点字の分も収録していただきますが、セミナーでは識字についてお話しする時間がありませんでしたため本には収められませんので、書き下ろしの形でここに掲載させていただきます。

## 漢点字を

## 知っていますか



## ■扉の文章

点字というと、かなで表現されているものと認識している方が多いと思われませんが、じつは漢字を表現するための点字もあるということは、あまり知られていません。大阪府立盲学校の教諭だった故・川上泰一（たいいち）氏によって考案された「漢点字」の普及をめざし、横浜漢点字羽化（うか）の会を主宰されている岡田健嗣さんに漢点字がどのようなしくみで作られているのかを、漢字の成り立ちをまじえながら、簡単にご紹介いただきました。

また、視覚障害者にとって漢字の成り立ちを知り、漢字を覚えることがなぜ大切なのか、視覚障害者の識字という観点から語ってもらいました。

- 漢点字の普及をめざし、漢点字羽化の会を結成
- ブライユの点字も彼の生前は普及しなかった
- 1890年、ブライユの点字をもとに日本語点字



す。ただそれを学ぶ機会がない、そういう環境に置かれて、小学校、中学校、高等学校の課程を過ごします。

一般に、小・中学の教育の主眼は、漢字を教えることと言っても過言ではありません。が、視覚に障害のある子どもは、そういう勉強はしないのです。では特別な勉強をするかと言えば、それもありません。このようにして密かに胸の内に、非識字者であることのコンプレックスを育てて行くのです。

私も曲り形に大学を出ました。「曲り形」と申しますのは謙遜ではありません。実態として不十分だと感じていたのでこのように申します。

現在一般の大学に、幼少時からの失明者が100人近く通っています。この学生たちは、私がそうだったように、漢字の知識を問われないうちに入学し、やがて卒業して行きます。

そして盲学校の教員や、公務員となって図書館の視覚障害者担当などとして、視覚障害者を対象とする職業に就きます。

## ② 非識字は隠し通せる

しかしいま申し上げたことは、世の中の人のほとんどが知りません。大変意外なのですが、文字を知らないということとは、その気になれば、一生隠し通せるよ

うなのです。

かくいう私も、暫くぶりに会った大学時代の友人に、漢点字の普及活動について話したことがあります。彼はどう理解したらよいか迷ったようで、「何でそんなことを一所懸命やっているんだい、勉強したい人は勝手に勉強すればよいのだから、あなたがそれほどに力を入れる必要はないのではないか？」と言うのでした。私は驚いてその言うところを聞き返しました。

よく聞いてみればなるほど、学生当時の私が文字を知らなかったことに、彼は気づいていなかったのでした。彼のいうところでは、常識として、義務教育を終えれば、出来不出来はあっても、漢字のおおよそを知ることができて、漢字を知らない人がいることを想像することができないのです。してみると常識的には、私をはじめ視覚障害者が漢字を学ぶ機会を得られないという現実には、思いを及ぼせることのできる人は、極めて少数と言えます。まして彼も私も大学生です。入学時の漢字のテストは大変難しかった。そのテストがフリー・パスされていたとは……。そんなことがあるうとは、いまになって初めて知ったというのです。彼は、柄でもない、なんでそんな慈善事業みたいなことをやっているのか、と思ったといっています。

7、8年前に、世界的なベストセラーになった「朗読者」（シュリンク著）は、ポルノ仕立ての小説として喧伝されました。がその本来の主題は、非識字（文盲）者の悲劇でした。非識字を克服する困難、そして非識字のもたらす不幸、非識字は隠せるがそのために享受しなければならぬ孤独。私は強く衝撃を受けました。

現実にはわが国に、そんな人が暮らしていること、そのことを皆さんには是非知っていただきたいと思いません。

### ③ それを知る少数の人たち

幼少時からの視覚障害者が非識字であることを知る人たちが、ごく少数おられます。言うまでもなく視覚障害者を取り巻く晴眼者の皆さんです。具体的には盲学校の晴眼の先生や図書館など勤め先の同僚の皆さんです。そのような人たちは非識字である視覚障害者を、どう見ているのでしょうか？

残念ながらそのことに言及されているところに、直接接する機会を得ておりません。せいぜい親しくしていただいている方々から、ご本人の奮起を期待するというお言葉を聞くばかりです。そこで私がこれまで聞いてきたことから想像することをお話しさせていただきます。

非識字である視覚障害者も、またそれを取り巻く晴眼者の皆さんも、極めて閉ざされた空間に生活しておられる。そして相互にダブル・バインドな関係に置かれておられる。どういう関係かと言えば、視覚障害者は自身の非識字状態を表立たせまいようにしたい。晴眼者は、その非識字をあげつらうことで、同僚である視覚障害者の立場を悪くすることを厭う。このような関係から本来識字をはかることが社会生活には欠かせないことをよく知っていないながら、それに触れないことで、互いの立場の温存を優先することになる。

文字を学ぶこととは大変困難なことです。視覚障害者の中には、漢点字を勉強したいが、勉強し続けられるかの不安を持つて、踏み切れない人が沢山おられると思います。そこで一歩を踏み出すに



マグネット円盤で漢点字の構造を説明する

は、このような保管関係からの脱却も求められます。もう一つ考えられることは、ルイ・ブライユが点字を創案しましたが、その普及はなかなか進まなかった。その理由が、晴眼の教師の抵抗にあったと言います。現在の漢点字の普及の遅さにも、同様の力が働いていないとは限りません。

④ 識字は困難、漢点字は漢字より難しくない

私は漢点字の普及を、わが国の視覚障害者の識字と捉えています。しかし、本来識字は、決して易しいものではありません。現在も世界中でその困難に向き合っている人が沢山おられます。

わが国でも識字は、なかなか達成されませんでした。明治初頭に生まれた女性たちは、死ぬまで非識字(文盲)でした。

現在のわが国の識字率は99.8%と言われます。

この識字率は初等教育の修了者の数から割り出されたものです。初等教育の義務化によって達成されました。そしてこの数値は、実際に文字の読み書きができるかを問うたものではありません。あくまで初等教育の修了者の数によっています。総務省・統計課からの情報です。視覚障害者もその意味で、初等教育を修了することで、漢字を知らなくとも、識字率の数に数え

られることになりました。

わが国の識字教育の歴史を見ても、現在の世界で行われている識字運動を見ても、その困難さははかり知れません。

私は、漢点字の普及が視覚障害者の識字だと申しました。多くの人から、漢点字の普及が進まないのは、漢点字が難しいからではないかというお言葉をいただいております。が、難しいから普及が進まないのか、まだそれは検証されておりません。ただ、識字はそもそも難しいこととだけは言えるのです。

【付記】点字の漢字は2つある(？)

このセミナーでも質疑で、「6点漢字」に触れないのは片手落ちではないか、というご指摘をいただきました。よく言われる「2つの点字の漢字」のことで

す。あえて私は、漢点字が唯一の漢字を点字であらわした触読文字だと申しました。

その理由は、文字は読むものということに尽きます。

漢点字は、川上先生の創案から、一貫して読みを一義としてきました。触読できなければ、点字の漢字とは言えない、こういう立場を採ってきました。

6点漢字を勧め  
る人たちからも、  
このコンセプトに  
対する批判はあり  
ません。しかしな  
ぜか、6点漢字を  
勧める人たちは、  
6点漢字を読もう  
とはおっしゃいま  
せん。6点漢字で  
書かれた本を作っ  
たり、読むための  
テキストを作った  
りすることはない  
のです。

漢字は知りたい  
が、漢点字にするか6点漢字にするか、どちらを勉強  
しようか迷っている人がおられると、私は、漢点字を  
勉強すれば、漢字を勉強するのとおなじですよ、と申  
し上げます。

でき得れば子どもたちに漢点字を教える機会が訪れ  
ることを願って止みません。



熱心な聴講者の皆さん

## 点字から識字までの距離(五四)

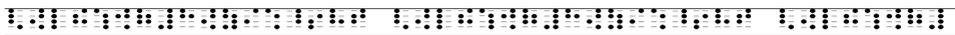
### みどり学級へのサーブス(三)

～ 緑学級での催し物(一) ～

山内 薫 (墨田区立緑図書館)

前回と前々回にもみどり学級で行った大型絵本や、  
こいのぼりの歌、そして長いヘビの人形を使った遊び  
などを紹介したが、日頃どんなことをどんな工夫をし  
て行っているかを二回にわたってご紹介しようと思  
う。今回は丁度一年目の二〇〇四年三月十一日におこ  
なった出し物を写真と共に見て頂こうと思う。この日  
は山内、竹内、樋浦(ひうら)の職員三人と慶応大学  
の図書館学科の学生、佐山さんの四人でみどり学級を  
訪れた。佐山さんは卒論のテーマに高齢者への図書館  
サーブスを選んだため、緑図書館の高齢者サーブスを  
見学するために何度も来館してくれ、そのたびに得意  
のピアノを弾いてくれたりしていた。

この日はまず佐山さんが落語絵本の『まんじゅうこ  
わい』を読んでくれた。(写真一) 絵がはつきりして  
いて話も分かりやすいので、子供たちの反応も上々だ



った。次に竹内が、ことば遊びをやった。(写真二)黒板に「たんぼぼ」と書いて、子どもたちに「た」のつくことばをいろいろ言ってもらい、その言葉を黒板に書いていき、手を叩きながら「たんたんたんぼぼ、たぬき、たいこ・・・」と黒板に書いた文字を順々にみんなで唱和していった。「た」の次には子どもたちの名前を黒板に書いて、名前の頭文字と同じものを言ってもらった。「さゆり」ちゃんなら「さゆり、さかな、さんま、さる・・・」、「なな」ちゃんなら「なな、なす、な



2-竹内ことば遊び



1-佐山さんの「まんじゅうこわい」

のはな、なし・・・」とやはり黒板に書いて、手拍子に合わせて唱えていく。このことば遊びは、「まりな」ちゃん、「しようこ」ちゃんと続くのでだいぶ長くなり、ちよつと単調になってきたので、山内はやらピアノに走り、手拍子に合わせて適当な和音を手拍子に合わせて弾いていった。できれば事前に打ち合わせしておき、ちよつとしたメロディや和音を初めから使って、ことば遊びを組み立てれば良かったと思つた。その後、竹内が絵本を一冊読んだ。

次に大きな字で紙に書いた「ふしぎなポケット」の歌詞を黒板に貼り、佐山さんにピアノで伴奏してもらつて、みんなが歌を唄つた。(写真三)山内が着るチョッキに3つのポケットが付いているので、左右に二つずつ、胸に一つのチョコレート(ビスケットがなかったので袋入りのホワイト・チョコレートを使った)を入れて「ポケットの中にはビスケットが一つ、ポケットをたたくとビスケット



3-歌ふしぎなポケット





左は、私岡田の古い知人の生田典子さんから頂戴した原稿です。生田さんは現在病魔と闘っておられます。勝利を！

## 出会い

かながわ市民オンブズマン代表幹事

生田 典子

人は、生まれてから死ぬまでの間に数え切れないほどの人に出会う。その中で、ほんの僅かな時を共に過ごただけであっても、心のヒダに深く刻まれて一生忘れない出会いがあるものだ。私にもそういう出会いの人が何人かいる。この「うか」の代表者である岡田健嗣氏もその一人である。



今から35年ほど前のことだった。当時、教員をしていた私は日本の社会の矛盾を考えていた。民主主義を掲げて平等社会を謳っているけれども、日本の社会はどこでも「与えるサイド」と「与えられるサイド」に分かれているのを感じていた。「与えるサイド」は上に立ち、「与えられるサイド」は下に居て物言い

も遠慮がちだった。それは学校内も同じことだった。特にハンディキャップを持っている人が置かれている状況は際だっているように感じていた。そこで、私は実際にハンディキャップを持っている人々の場に参加したいと考え、視覚障害者のための朗読のボランティア活動を始めたのだ。声の週刊誌を創ったり、視覚障害者の方々が希望する本を読んだりして、何人もの方々と知り合った。やがて朗読だけでなく、運動会に参加したり、一緒にお茶を飲んだりもした。しかし、何かしつくり来ない部分があった。一緒に関わっている所謂「健常者」（嫌な言葉ですね。常に健康な人っているんですかねえ？）は、障害を持った人を「かわいそうな人」という感じで助けていること、また障害を持った人々も、常に控えめに遠慮している感じであることに気が付き、「これは違う」と思い続けていた。その思いがさらに強くなっていた頃、一人の青年が現れた。最初から彼は、話し方も態度も他の人と違っていた。私達はまさに対等だった。文化、教育、福祉、芸術等と、あらゆる分野に関して議論をした。意見交換をしながらお互いが学びあった。年齢も異なるこの若者こそ、岡田健嗣くんである。（「くん」でないかと、違う人のような感じになってしまうので、悪しからず。）ここで、一つのエピソードを紹介したい。

ある時、海へ行くことになった。鎌倉の海辺に着いた時、将に夕陽が空を染め海面の色を変えつつあった。その情景を私は絵の具で絵を描くように一生懸命説明していた。波の色、水の動き、雲の様子、次々と変わっていく空模様なども説明していた。その時、健嗣くんが「今の太陽はどんな色ですか？」と言った。「ただ赤いのではないし、薄い赤でもないし、黒っぽい赤でもないし、紫が混じった赤でもないし、薄っぺらでなく、さりとて厚みがあるというわけでもないし……」と悩みながらしゃべっていると、「もしかしたらホアン・ミロの赤ですか？」と健嗣くんに聞かれたのだ。その時のショックは今でも忘れない。その通り、ホアン・ミロの赤だったのである。

その後ずつと、私は「色とは何か」と考え続けた。

物が見えると思っている私達は、「色」に対して「見える」と思っているが、誰もその見えていると思っ  
ている色を、お互いに同じかどうかを確かめ合っ  
たことがない。同じ絵の具の赤でも、Aさんの見ている赤と私が見ている赤と同じであるかどうか実際は分からないのだ。お互い同じ物が見えていると信じているだけである。視覚障害の人が頭の中で描かれている色も、目が見えると思っ  
ている人の見ている色も、結局

は同じではないか、という思いを抱くようになった。健嗣くんが、考えるキツカケを与えてくれたのだ。た。

また、健嗣くんと本の話をする時も、彼の記憶には、いつも圧倒されていた。「記憶」というものは頭の中に残されている資料図書館とも言える。健嗣くんの場合、その「資料図書館」が非常に充実していた。だから彼と様々な話をするのが楽しかった。こうして時が過ぎ、やがてお互いの生活の変化と仕事量が増え続けたために、次第に疎遠になり、ついに30年余りの月日が過ぎていった。

◆ ◆ ◆

昨年の夏、私は進行癌のアタックを受け、死を覚悟した。そんな時、神は再び健嗣くんと会う機会を与えてくれたのである。ついに再会の日が来た時、喜びと同時に、幾星霜の月日がお互いを変えているのではないかと不安もあった。しかし、鎌倉駅の改札口を出てきた彼に、「健嗣くん」と最初の一声をかけた瞬間、時は昔に戻っていたのである。そのしゃべり方・関心・怒り・喜び、すべて変わっていなかった。勿論お互い新しい事にも関わっている。(特に健嗣くんが現在奮闘している「漢点字」については、また機

会があれば触れたい)。それをも含めて以前の生き方の延長線上にあり、すぐに理解しあえたのである。たとえ長い年月、異なる体験・環境の中で過ごしていようとも、生きる姿勢が同じである場合、顔に皺が増えようとも、精神の有り様は持続しているものだ、ということを健嗣くんとの再会は証明してくれた。いい出会いは、生きていくのである。

## 見はてぬ夢を（一）

「視覚障害者」の新時代を啓いた

左近允孝之進の生涯

山本優子

「4じに いつもの ばしよで まちあわせ おねがいます しょこう かんせい かんじ へんかん ちえつく おねがい ますみちゃんの ひひょう きかせて こうじ」

携帯メールに目を通すと、わたしは、「オーケー」とだけ返信した。とうとう初稿を書き上げた？ 読んでもええけど、漢字変換いっぱいさせられるのは、かなわんなあなどと心の中でつぶやいて、メールの送り

主、浩二（こうじ）さんとの待ち合わせ場所に向かった。

浩二さんとの出会いは、大学の点字サークルだった。大学生活にも慣れてなんとなくなるとるんだ気持ちになつてきたころ、「点字サークルで新しい夢を！」という看板が目に残まり、ちよつとのぞいたのが、きっかけだった。「点字」という言葉は知っていたけれど、特に関心はなかった。見学して初めて、点筆や点字タイプライターやパソコン入力で「点字」を打ち出すということを知った。佐々木浩二という若い人が、「講師」として教えていた。見えない人だというのはすぐわかった。サークルの人たちと雑談しているうちに、その人は、明石から通学している私と同じ方向、神戸の垂水区（たるみく）に住んでいるとわかった。自然の流れで、終わると一緒に帰りましようということになり、わたしは生まれて初めて見えない人と腕を組んで阪急甲東園（こうとうえん）駅まで歩かされた。山陽電鉄の滝の茶屋（たきのちやや）駅までと言われたのだ。電車に乗っていた約一時間の間、浩二さんはしゃべり続けていた。内容はよく思い出せないが、時事問題から肩こり解消法、たわいない日常のことなど、なんでも面白おかしく早口でしゃべる。この

人、吉本に入れるんちゃうか、などとわたしは思った。周りの目を気にしながらも、楽しかった。駅が近づくと、わたしは心配になってきた。家まで送れ、言われるんちゃうよるか；わたしは、まだ先の西明石まで乗って行くのだ。

「駅からは、どうやって帰るんですか？」

「足で歩いて」

浩二さんは、答えた。そして、たんで持っていた白い杖を手品みたいに音をたてて長くし、降りる方向に身体を向け、思い出したように言った。

「真純（ますみ）ちゃん、きょうは、おおきに。また、機会があったら、手引き頼んでもええですか？」

わたしは、「いいですよ」と、答える他なかった。

「メール・アドレス、教えてくれはる？」

浩二さんが携帯を取り出したので、わたしはびつくりした。見えない人が音声の出る携帯を使ってメールのやり取りをするなんて知らなかったのだ。浩二さんは、器用にわたしのアドレスを打ち込んで、

「ほな、またね」

と、さっさと電車を降りていった。白杖を動かしながらホームを歩いていく浩二さんの姿を、窓からわたしは見送った。その姿と駅が遠ざかってから、わたしはフツと息をついた。サークルでのあれこれを思い巡

らしてから目を上げると、夕焼けの中にくつきりと明石海峡大橋が見えた。

浩二さんは、夕焼けも見えへんのやな、と、思った。

浩二さんからは、すぐにメールが届いた。全部ひらがな、分がち書きの文章だ。わたしも、つられてひらがなで返事を送った。すると、即また返事が来た。こうして、わたしは点字サークルに入るようになってしまった。そのうち、浩二さんがどこそこに行くという時の手引きを頼まれるようになった。高速神戸の福祉センターでの会合だの、摩耶山（まやさん）登山に参加するだのの時に駅で待ち合わせ、一緒に出かけることが重なっていった。そのうちに土曜日はほとんど浩二さんと出かけるようになってしまった。というのも、浩二さんは滝の茶屋にある兵庫県立盲学校の寮で生活していて、月曜から金曜までは外出許可を取らないと外に行けない。だから、週日は、たまに点字サークルで教えたりすることもあるけれど学校と寮にこもっておとなしくしている。それだけに加古川（かこがわ）の両親宅に戻る土曜日が来ると、日中は何かに参加したくなるというのだ。これまで、その都度いろんな人に手引きを頼んできたけれど、確実に引き受けて

くれる人がいなかった、真純ちゃんは気軽に出てきてくれるから助かると、面白そうに言う。

浩二さんのことは、だんだんわかってきた。彼は、小さいころから徐々に進行する目の病気を患っていた。高校二年生の時急に病気が進み、高校卒業を間近に控えたころ失明したという。卒業証書は手にしたものの、大学受験も就職もせず、家にひきこもってしまった。二十歳を過ぎるまで家から一步も出ずに過ごしたという。そんなある日、全盲でキリスト教会に行っている人から中古の音声パソコンを譲り受けた。インターネットで外の世界をのぞくようになって、県立盲学校の専攻科理療科というところを見つけ、関心を持った。ついに二十代半ばで、その寮に入り、鍼灸の学びを始めることになった。今は、国家試験と、教師になるため筑波大学合格を目指して勉強中だという。わたしは、彼の話に単純に感動した。その上、彼が小説を書いているということに驚いた。

「県盲の創設者の伝記やねんけど……」  
と、彼は、ある時照れたように言ったのだ。

「盲学校に入って初めての中間テストが終わって遊んどいたら、六月十日が創立記念日でまた休みや。佐々木はこの学校に入ったばかりで創設者のこと知らんやろからいうて、担任が『福祉の灯』いう冊子から

創設者の伝記を読んでくれたんや」

「個人教授ですね」

「うん。創設者の話なんかめんどくさいなあ思いながら聴き始めたけど、そのうちに魂が震えるつちゅうかな、ドカーンと胸になんか打ち込まれた気がしてん。なんでこの人、若いうちからこんなことができたんやろって」

「どんなこと、した人なんですか」

「おれ、担任にもっと詳しく訊こうとしたんや。左近允孝之進（さこんじょう こうのしん）《註 一般にサコンノジョウと呼ばれることが多い。鹿児島ではサコンジュとも読まれる》先生いう人やねんけどね、なんで失明してそんなにはよう気持ちの切り替えができて、鍼を覚えようって決められたんですか、見えへんのにどうやって九州から関西まで来はったんですかとか聞いたけど、担任はわからん、おまえ調べてみて、言う。考えよううちに、自分が県盲に入ったのがこの左近允先生と出会ったためやったような気がしてきてん」

「それで、調べ始めたんですね」

「うん、けど、ショックやったことに、百年ほど前の人やのに、資料なんかほとんどあらへん。わからんことだらけやねん。」

「なんでですか？」

「死んで八十一年以上たってるから戸籍は処分されて残ってへんし、直系の親族や子孫も見つからんからや。ちゆうことは、今掘り起こしとかな、あと何年かたったら、もつとこの人のこと忘れられてしまう。そう思うたら矢も盾もたまらんようになって、他の人がやらへんのやったら、おれが書いたる、思うてやりだしてん」

「めっちゃようけ勉強せなあかん言うてはったのに、よく書く時間とれますね」

浩二さんは、寮生活の時間割や規則をいかに破って（利用して）、小説を書く時間を捻出しているかを面白おかしくしゃべった。

「五時半から晩飯。六時から七時半まで風呂やねんけど、小さい子が風呂で遊ぶ相手なんかしてられへんし、男女で時間区切ってるから順番待つのもじやまくさい。もう寮では風呂入るのやめてね、週末親の家でシャワーを浴びるだけにした。風呂の時間、ルーム・メイトの奴はどっかで遊んどうから、その間に書く」

「一週間にいっぺんしかシャワー浴びへんのですか？」

わたしがびっくりすると、浩二さんは、

「一日一時間半掛ける月から金の五日間の時間節約、何時間になるか計算できる？」

と、冗談か本気かわかりかねる調子で言った。

「七時半から九時までの自習時間は、指導員のおばちゃん回ってくる足音に緊張しながら作業する。十時に消灯せんとあかんから、自習室に行く。そこではパソコン使われへんから、資料覚えたり、校正したりするねん」

その原稿の漢字変換の間違いをチェックしてくれとわたしは頼まれたのだった。

夕方浩二さんと滝の茶屋駅で会った。浩二さんに頼まれた本の朗読を入れたカセット・テープを渡し、かわりにわたしが受け取ったのが、パソコンで墨字（見える人が使う文字）に打ち出された原稿だった。

わたしは電車の中で読み始めた。漢字変換をいちいちチェックするのは大変やなと心の中でつぶやいていたが、読み始めてみると、変換ミスはあまり無かった。ふだん携帯で送られてくるメールは全部ひらがなのことが多いのだが。この小説執筆に気合を入れている浩二さんはすでに誰かに目を通してもらったのかもしれないが、よほど何度も手直したのだろう。わたしは、すぐに作品世界に引き込まれていった。



# 目次

- 一 父逝く
- 二 十有五にして学に
- 三 東京
- 四 日清戦争
- 五 光を失う
- 六 修行
- 七 増江
- 八 私塾開始
- 九 邂逅（かいこう）
- 十 点字活版機
- 十一 神戸訓盲院
- 十二 恵子
- 十三 「あけぼの」
- 十四 出会い
- 十五 第一回卒業式
- 十六 見はてぬ夢を

発刊によせて

あとがき

参考資料

左近允孝之進 年譜

## 見はてぬ夢を

### 一 父逝く



あわただしく戸が叩かれる音で、孝之進（こうのしん）は目を覚ました。何やら男たちの声が聞こえてくる。母千代（ちよ）が受け答えをしているのも夢の中で聞いていた。

目が覚めると隣の布団に母はいなかった。部屋はすっかり明るくなっている。いつもより遅くまで寝ていたらしい。孝之進は布団をけつて起き上がり、台所に行った。

土間の横に割烹着姿が丸くなって伏している。孝之進は、かけよった。

「おっ母さん、おっ母さん、どげんしやった？（母さん、母さん、どうしたの？）」

母は、頭をあげた。顔は、くしゃくしゃだった。唇が震えていた。

「おっ母さん、どげんしやった？ 具合（あんべ）が悪（わ）りな？（母さん、どうした？ 具合悪い

の?)」

母は、かすれ声で言った。

「コウどん、魂消(たまが)いやんな。お父っさんが死んみやったど(コウ、驚くなよ。父さんが亡くなるれた)」

孝之進は、背中が寒くなった。

一八七七年(明治十年)、「西南の役」まっ最中の薩摩(鹿児島県)だった。

それからのことを、孝之進ははつきり思い出せない。お寺から、よく知っているお坊さんと数人の大人たちが来た。一八七〇年(明治三年)五月二日生まれで、ようやく七歳を迎えたばかりの孝之進が通夜や葬式というものに出たのは初めてだった。これまで見たことのない黒い着物を着た母が、怖い顔つきで飯をたいたり、雑巾がけをしたりしていたことが記憶に刻みつけられた。

参列してくれた人たちは、きまって孝之進の頭をなでながら、同じような言葉をかけてきた。

「コウどん、お前(ま)や、も、一人前(ひといまえ)じゃっでな。こいからはお父っさんに代わっせー、お前(まい)がおっ母さんの面倒(めんど)をし

っかりみいやいお。お前には出来(でく)いが(お前はもう一人前だからな。今後父さんに代わってお前が母さんの面倒をしつかりみるのだぞ。お前にはできる)」

孝之進は、

「はい」

と、答えていた。人がなにやかやと声をかけてくれることに対して、とにかく、「はい」と、答えていた。

尚之進(しょうのしん)じいちゃんは、焼酎を飲みながら、叫んでいた。

「隼太(はやた)ん奴(やち)や、西郷(せご)さんためい、戦(たたこ)っせー、け死んだ。尚一(しよいち)や、お国(くに)んためい、け死んだ。どっちい転んでん、おしまいじゃ(隼太の奴は、西郷さんのために戦って死んだ。尚一(しよいち)はお国のため

に死んだ。どっちに転んでもおしまいだ)」

隼太は、父尚一の従兄弟にあたる。孝之進は隼太兄ちゃんと呼んでいた。熱血漢で磊落(らいらく)な人だった。隣村で焼酎造りをしていたが、兄弟のない孝之進を不憫に思っか時たまやつてきて孝之進と遊んだり、川で泳ぎを教えたりしてくれたものだ。

孝之進が生まれ育った薩摩の上龍尾町（かみたつおちょう）では、どこからでも雄大な桜島が見える。誰もが桜島を誇りに思っている。隼太兄ちゃんは特に桜島を自慢していたから、父は時々「桜太郎」と、呼んだりしていた。孝之進も真似をして「桜太郎兄ちゃん」と、呼んでみたこともあった。

一八七七（明治十年）、「西南の役」が始まると、隼太兄ちゃんは西郷隆盛のために戦いに行くと孝之進は聞かされた。程なくして、父尙一も戦いに行くと言われた。隼太兄ちゃんが出発する前には、親戚が集まって晩飯をみんなで食べたのに、父の時には何もしなかった。母と二人、父に向かって何度も何度も手を振って見送った。

母と一緒に、毎朝神棚の前で手を合わせて父の無事を祈るようになった。そのあと、必ず隼太兄ちゃんのためにも祈った。兄ちゃんは薩摩軍にいるという。ところが、父は官軍（政府軍）に入ったという。母は、兄ちゃんを父の敵と考えているふうは全く無かった。ただ、それぞれの無事と、すべての戦っている人たちの無事を祈るのを孝之進は見つめ、自分も真似をして祈った。母には、何度も尋ねた。

「何故（ないご）て、お父っさんな、西郷さあん敵

（かたき）いなっちよいやっとな？（どうして、父さんは、西郷さんの敵になってるの？）」

西郷さんは、郷土の誇りだ。英雄なのだ。

母は、

「お父っさんな、新しか日本ぬ作いためい、勇気を持つせー、西郷さあい付つきやらんじやったと。お父っさんのしやっこて間違（まっげ）はなか（父さんは、新しい日本を作るために勇気を持って西郷さんにつかなかったの。父さんのされることに間違いはない）」

と、答えるのだった。

孝之進は、よく理解できなかった。ただ一つのことだけがしつかり心に刻みつけられた。命より大事なものがあって、そのためには戦わなくてはならない、ということだった。

隼太が逝ったことを母から聞かされたのは、数日前だ。そして、今度は父が取り去られたというのである。孝之進は、

「お父っさんの行つきやたちいう極楽（ごくら）かどげな所（とこい）じやろ（父さんが行ったという極楽とはどんな所だろう）」

（以下次号）

# 漢文のべし

責レ子 ヲ

晋 陶潜

白 髮 被<sub>ヒ</sub> 兩 鬢<sub>ヲ</sub>

肌 膚 不<sub>ニ</sub> 復<sub>タ</sub> 實<sub>タ</sub>

雖<sub>モ</sub> 有<sub>リト</sub> 五 男 兒<sub>一</sub>

總 不<sub>レ</sub> 好<sub>ニ</sub> 紙 筆<sub>一</sub>

阿 舒 已<sub>ニ</sub> 二 八

懶 惰 故 無<sub>レ</sub> 匹

阿 宣 行<sub>リ</sub> 志 學

而 不<sub>レ</sub> 愛<sub>ニ</sub> 文 術<sub>一</sub>

雍 端 年 十 三

不<sub>レ</sub> 識<sub>ニ</sub> 六 與<sub>レ</sub> 七

通 子 垂<sub>ニ</sub> 九 齡<sub>一</sub>

但 覓<sub>ニ</sub> 梨 與<sub>レ</sub> 栗

天 運 苟 如<sub>レ</sub> 此

且 進<sub>ニ</sub> 杯 中 物<sub>一</sub>

子<sub>ニ</sub>を責む

晋 陶潜

白髮兩髪を被い 肌膚復た実たず

五男児有りとも雖も 総べて紙筆を好まず

阿舒已に二八 懶惰故より匹無し

阿宣行リ志学 而も文術を愛せず

雍・端年十三 六と七とを識らず

通子九齡に垂として 但梨と栗とを覓む

天運苟に此くの如くんば 且らく杯中の物を進めん

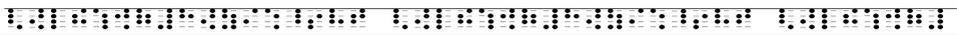
【五言古詩】私はすっかり年をとつてしまつ

たが、五人の息子たちはそろつて勉強嫌いで

ば、まあ酒でも飲むことにしよう。

陶潜（陶淵明）は六朝時代の東晋の詩人。王維・孟浩然、李白・杜甫などの唐代の詩人達や、日本の文学にも大きな影響を与えた。

長男の阿舒と次男の阿宣の「阿」は名前の上につける愛称。雍・端は、(同じ年の)三男・四男の名。五男の通子の「子」は愛称。二八||十六歳のこと。志学||十五歳のこと。『論語』の「吾十有五にして學に志す」による。苟(まこと)三||もしもほんとうに。仮定を強調する助字。「いやレクモ」とも読み、意味は同じ。且(しばラク)||まあまあ。ともかく。杯中の物||酒のこと。



白 髮 被 ヒ 兩 鬢 ヲ

肌 膚 不 復 タ 實 タ

雖 モ 有 リト 五男 兒

總 ベテ 不 好 マ 紙 筆 ヲ

阿 舒 已 ニ 二 八

懶 惰 故 ヲリ 無 シ 匹

阿 宣 行 ヲ志 學

而 モ 不 愛 セ 文 術 ヲ

雍 端 年 十 三

不 識 ラ 六 ト 與 ヲ 七

通 子 垂 トシテ 九 齡 ニ

但 覓 ム 梨 ト 與 ヲ 栗

天 運 苟 ニ 如 クン バ 此 クノ

且 ラク 進 メン 杯 中 ノ 物 ヲ

※ 遠藤哲夫『語法詳解 漢詩』（旺文社）を主に参照しました。

**前号の訂正とお詫び** 前回の漢文の説明文中の、「混沌」は「渾沌」の誤りです。

## 〆報告と〆案内

### 一 出版UD研究会のセミナーで

去る八月三十一日・一八：三〇から、東京都千代田区にある東京しごとセンターで、出版UD研究会（成松一郎座長）の、第十二回セミナーが行われました。そこで本会の岡田が、漢点字のお話をさせていただきました。大勢の皆様のご来席に、身の引き締まる思いでした。

お越し下さいました方の多くは出版に関わっておられて、文字や活字文化、あるいは活字メディアに関しては手練れの皆様です。また、視覚障害者の方々もお見えになりました。ご帰宅になられた後にも、漢字や漢点字に関心を持続していただければと願ってお話しさせていただきます。東京漢点字羽化の会と本会からも幾人かのご出席をいただきました。大変力強い気持ちでお話しができました。本会の高橋幸子さんには、岡田の側でこまごまとお手伝い・お世話いただきましたこと、また、研究会座長の成松さんには、話が脱線しかけたり、誤った表現になったりするとき、軌道

を修正して下さいましたことに、大変助けられた思いしております。大変ありがとうございました。当日の模様が録音されたCDがございます。MP3形式で収録されています。ご希望の方には無料でお送り致します。お申し出下さい。

### 二 『字通』と『人名字解』を

「寄贈いただきました」

同セミナーに、株式会社平凡社の山本俊雄様と岩田吉弘様がお越し下さいました。

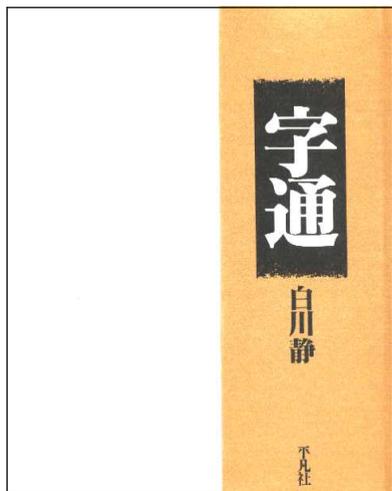
本会では現在、白川静先生の編纂になる『常用字解』（平凡社）を漢点字訳しております。そのお話を



「人名字解」表紙



「字通」CDROM



「字通」表紙

成松様から平凡社様へお伝えいただきましたこと  
から、同書の正誤表をお送りいただくことから始まり、  
セミナー当日には『人名字解』を、後日、白川先生の  
労作『字通』（活字版、CDROM版）をご寄贈いた  
だく辞儀となりました。思いも寄らぬ光栄に、更に氣  
が引き締まる思いでございます。

内容を吟味させていただきましたところ、『人名字  
解』は、『常用字解』との関連性が強いことから、  
『常用字解』の完成の目処が立ち次第に、漢点字訳の  
組上に乗せさせていただくことに致しました。『常用  
字解』同様、各見出し字の後ろに、その文字の字式を  
載せる予定です。

『字通』は資料として大きな力になってくれそう  
です。現在製作中の漢点字のテキストは成人向けです  
で、大人が漢字に興味を持ってくれるような内容に  
しなければなりません。この作業にとって、大変強い味  
方になってくれるものと存じます。  
心より御礼申し上げます。



### 三 セミナーが本になります

出版UD研究会主催のセミナーが、本になります。詳細は左の通りです。なお「UD」とは、「ユニバーサル・デザイン」の略です。

『出版のユニバーサルデザインを考える』だけれども読める・楽しめる読書環境をつくるために』出版UD研究会編 予定価2,400円＋税 B5判・240ページ（予定） 発行・発売…（有）読書工房

### 四 「見果てぬ夢」の漢点字版

今号から分載致します、山本優子著「見果てぬ夢」の漢点字版が、古賀副武先生のご厚意で完成しました。

兵庫県立盲学校創立者・左近允孝之進の生涯を描いた小説です。同校百周年を記念して、童話作家の山本優子氏に書き下ろしていただいたものです。活字版は、株式会社・山葉出版から発行されています。

お読みになられたい方は、お申し出下さい。

## 編集後記

今号は岡田さんの「出



版UD研究会」のセミナーに関連する報告が一番の目玉となっています。その講演を録音したCDROMは、正味二時間あまりの、たっぷりの内容なので、聞いてみれば得るところは大なるものがあると思います。

このCDROMはMP3という音声圧縮ファイルで記録されているので、パソコンで聞く分にはウインドウズに標準的につけてくる「メディアプレーヤー」を使って簡単に再生できますが、通常のCDプレイヤーで聞くことはできません。是非聞いてみたいという方は、ご連絡いただければ、そのようなCDとして提供することも可能ですので、どうぞお申し出ください。

（木下）

E-MAIL（岡田健嗣）： eib\_okada@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL：http://ukanokai.web.infoseek.co.jp

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は12月15日です。

※本誌（活字版・テープ版・ディスク版）の無断転載は固くお断りします。